

医療・環境保全・農村開発

設立3周年を迎えた助産所を中心に、母子の命を守る新しい1年が始まりました

3周年記念の12月中旬、ナプサさんの姪ジェブライリン医師によるクリニックを開設しました。今後も第3水曜日に同医師による妊産婦検診や一般診療を実施の予定で、地域の頼りになる医療機関を目指します。



12月にはまた、PIHSが育成してきた10地域の保健ボランティア/CHWの年次総会が開かれ、課題を共有しました。助産所の存在を知らせ、自宅出産の危険から母子を救うには地域ベースの地道な活動が不可欠で、恒例の「ベストCHW」選出もありました。

コロナで式典なしのまま学業を終え、日々新しい命と向き合う助産師モナリサ(写真左)。この1月と聞いていた国家試験は再延期で6月になったそうです。ナプサさんとの息の合った連携プレイで、かつ、コロナに細心の注意を払いつつ、安全な出産を手助けしています。



環境保全と収入向上のためのアグロフォレストリー事業

— より多くの住民に、地域に広げるために —

昨秋10月、2009年以降計6地域(シチオ)で助成金によるアグロフォレストリー事業を実施させていただいた三井物産環境基金から、これまでの成果を検証・総括し、今後の環境基金の在り方を見直したいという趣旨のアンケートが届きました。助成を受けた6件の中のタシマン地区(2014年度実施)についての質問でした。初回2009年度のブラクルについては、ゴム樹液による収入増加、新たな森林破壊減少等の成果確認をしていますが、タシマンはまだ顕著な成果はありません。ただし、樹木作物植栽で土壌流出はやや減ったと認められるため、ある程度成果確認と回答しました。

私たちがPFPというパートナーを得て、2002年以降助成金で実施した傾斜地農法によるアグロフォレストリー700ha余りは、山肌が露出する辺境地域全体からは微々たるもので、「周辺への波及効果」なしでは大海の一滴に終わります。2019年度以降、アグロフォレストリー事業の新規実施をやめて、評価活動にシフトしたのは、事業地域の成果確認とともに周辺住民への波及推進目的もありました。

残念ながら長年のパートナーPFPは順次農業スタッフが離職、さらに昨年はビビアンさんを失い活動を停止しました。今後の評価や波及活動は、事業地域に腰を据えて住民指導に当たるアニータ先生と農業専攻元奨学生ボニファシオが頼りです。過去の事業地域からの株分けや実生からの育苗(写真下)等最小限の資金と根気強い技術や理念指導で、山腹斜面を生活基盤とする先住民族の村の森林農業拡大、持続可能な収入向上と熱帯林修復を目指してほしいと思います。



森で集めた在来種の実生を苗床で育成、配布のため、アニータ先生の指導で鉢に植え替える代替学校の生徒



←
バナナの根元に芽生えた新株の採取作業

ココヤシの芽出し



→

客足が減ったCOWHED店舗で、販売促進研修が実施されました

— Facebook 写真報告より —

近隣都市部の感染拡大で観光客が減り、売り上げも大幅に落ちている店舗ですが、充電機会と捉えて、アメリカの



USAIDの支援を受けて開催された販売促進にかかわる研修には多数の組合員が参加、コロナ後に備えました。

販路を求める母親たちに頼りにされるアニータ先生



収入減でハイスクール中退の息子を持つ母親(右)が、親類が織ったティナラクを持参したので、買い取るとともに、縫製が得意な本人に小銭入を注文し、息子の復学を促しました。



2年前、セブ湖内の島にも先住民族学校を創ったアニータ先生。母親の一人がビーズ製品を持ってきました。

この島タウィタウィは当団体が7年前、アグロフォレストリー事業を実施し、当面の収入源として、母親にはビーズ細工を、父親には漁網を支援した地区でもあります。